

不撓不屈

ふとうぶくつ

金属の熱処理は日本の産業を一般的に支える基盤技術の一つ。加熱と冷却による熱処理加工を施すことで素材の性質が変化し、耐久性や耐摩耗性、耐疲労性、耐食性、耐熱性などさまざまな特性を付加できる。東洋金属熱錬工業所は1909年の創業以来、熱処理の草分け的存在として日本の産業振興を支え続けてきた。

ユーザー多岐に

強靱さを向上させる

東洋金属熱錬工業所 ①

熱処理のデパート

ための焼き入れと焼き戻か、高砂第1、第2工場し、圧延や鍛造などの影響を取り除く焼きならし、冷間加工性と被削性の改善や内部応力除去を行う焼きなましなどの一般的熱処理のほか、浸炭や窒化処理なども手がける。

ユーザーは鉄鋼業界のほか、自動車や建設機械、工作機械、農業機械、船舶、宇宙航空産業など多岐にわたる。社長の大山照雄は「熱処理のデパート」といえる総合力を持つ」と胸を張る。

特殊品や大型品は高砂第2工場、真空熱処理やガス浸炭などは大阪工場が担う。5工場で計約1

60基の熱処理炉を備え、多様な要望に応えられる体制を整えている。同社の最大の強みは、独自の熱処理炉を持ち、

独自開発の炉で差別化

西田繁和を中心に自社で独自開発。安定した熱処理の品質を確保するため最大直径4.4mの大型車両の条件を突き止め、それやベアリングの浸炭焼きの条件を突き止め、それ入れ処理が可能な炉を備え実現するため設備の構築

15年1月にはタイにも現地法人を設立。顧客の動向をみながらグローバルに拠点を広げている。

(敬称略)



える。「陸上輸送造を工夫している。「熱処理の能力で差別化が可能な最大規模の部品を受け入れられる」。このほは重要な柱となつていか、コイル材や薄物のパイプなど、通常では処理できない材料も引き受けている。顧客の要望に応じて長年、熱処理を行ってきた東洋金属熱錬工業所。製造業の海外生産シフトに熱処理炉は重要な柱」と語る社長の大山照雄氏(左)と常務の西田繁和氏(右)。

URL || www.tonez.co.jp